

第2章

母親の教育・子育てに
関する意識





第1節 母親の子育て観

2005年以降、子育ても自分の生き方も重視する母親、子どもといつも一緒になくても愛情をもって育てればよいと考える母親、文字や数はできるだけ早くから教えるのがよいと考える母親が増加している。

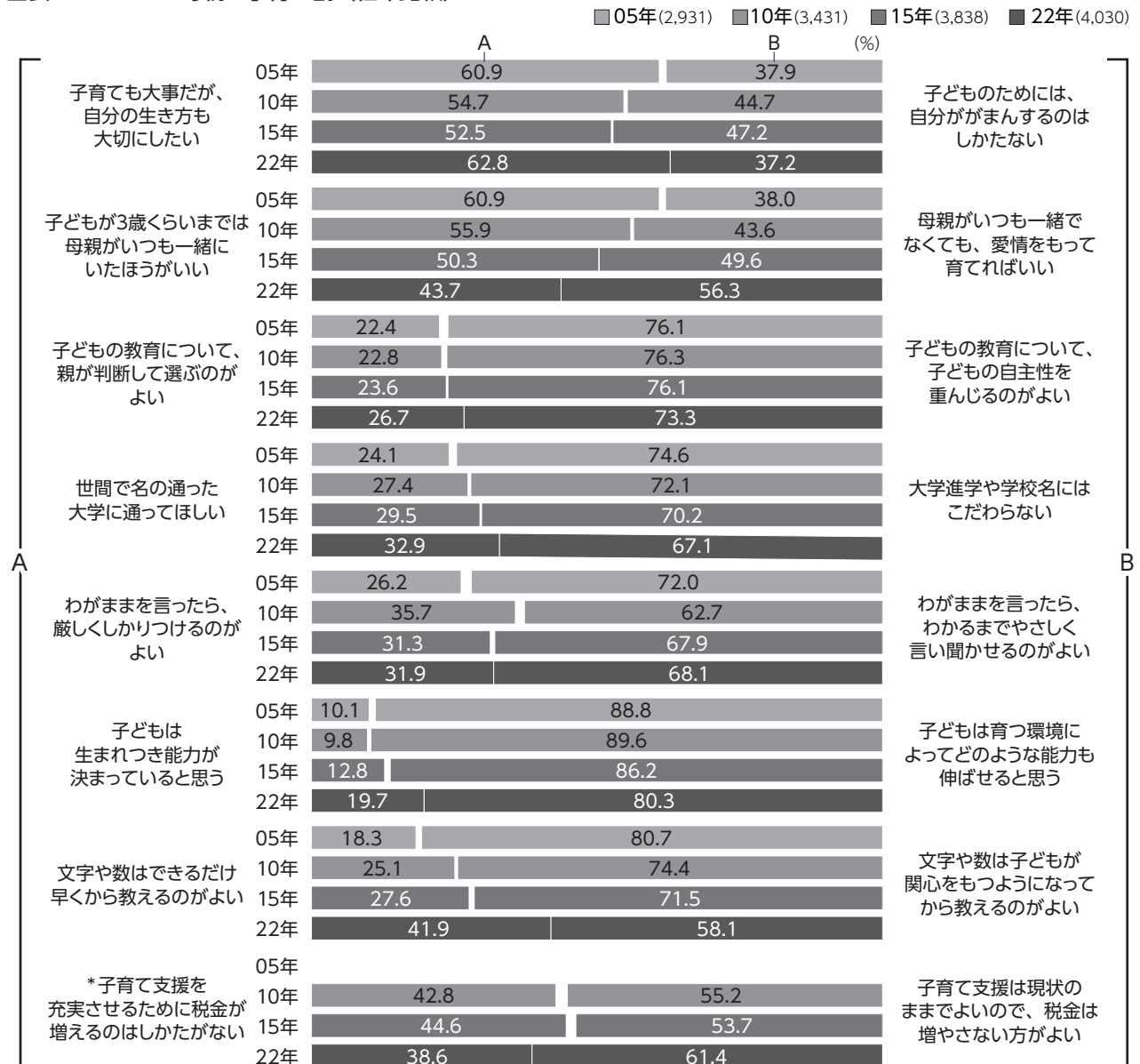
●母親の子育て観が変化

本節では母親の子育て観に関して、05年からの17年間で、どのような変化があったのかをとらえる。子育て

や子どもの教育に関するAとBの2つの意見のうち、母親の気持ちに近いほうを選択してもらった結果が図表2-1-1である。

まず、子育てと自分自身の生き方について、「子育て

図表2-1-1 母親の子育て観 (経年比較)



注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 15年調査までは無回答・不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注3) *は10年調査以降の項目。
 注4) ()内は人数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

も大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考える母親は05年から15年にかけて減少していたが、22年には62.8%と15年に比べて10.3ポイントも増加した。「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」を支持する比率は、05年では60.9%だったが、22年では43.7%と17.2ポイント減少した。反対に、愛情をもって子育てをすれば、3歳まで子どもといつも一緒にいなくても大丈夫であると考える母親がこの17年間で増加し続け、「3歳児神話」を信じている母親と逆転する結果となった。

次に17年間で大きな変化のあった、教育に関する意識をみていく。文字や数の習得について、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える母親は05年の18.3%から22年では41.9%と増加し続けている。子どもの進学に対する期待では、「世間で名の通った大学に通ってほしい」と考える母親の比率が増加傾向である(05年24.1%→22年32.9%)。子どもの学歴を重視する傾向や、早い時期から文字や数を教えたほうがよいと考える母親の比率は、17年間を通して一貫して増加している。

また10年調査で新たに質問項目を追加した、子育て支援のための税金の使い方については、「子育て支援を充実させるために税金が増えるのはしかたがない」とい

う考え方を支持する母親は22年には38.6%で、「子育て支援は現状のままでよいので、税金は増やさないほうがよい」と増税に賛成しない母親は61.4%であった。コロナ禍による失業や物価高騰があるなか、家計の経済的状況が厳しくなっている。そうしたなかで増税への不支持が高くなったと考えられる。

●「自分の生き方も大切にしたい」は4歳児の母親、「文字や数はできるだけ早く教えたい」は5歳児の母親で増加

次に、子どもの年齢別に、母親の子育て観の経年変化をみていきたい。

まず、図表2-1-2にあるように、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」を選択した母親の比率をみると、子どもの年齢を問わずに15年に比べて増加している。そのなかでもっとも変化が大きかったのが、4歳児の母親であった。15年は51.2%であったが、22年では66.6%と15.4ポイント増加した。また、「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える母親も、増加している。15年と比較して大幅に増えたのは、5歳児をもつ母親である。15年は21.9%であったが、22年は41.3%と19.4ポイントも増加している。

図表2-1-2 母親の子育て観(子どもの年齢別 経年比較)

		(%)						
		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	10年	50.6	55.4	54.4	56.9	53.7	56.0	54.0
	15年	54.9	52.0	51.4	47.3	51.2	56.8	55.4
	22年	62.3	64.2	60.5	61.3	66.6	61.5	62.7
B. 子どものためには、自分ががまんするのはしかたない	10年	49.1	44.0	45.4	42.6	45.6	42.8	45.6
	15年	45.1	48.0	48.2	52.5	48.6	42.6	44.1
	22年	37.7	35.8	39.5	38.7	33.4	38.5	37.3
A. 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい	10年	40.6	33.3	28.7	21.3	20.9	15.1	22.9
	15年	47.8	37.3	28.5	22.3	20.1	21.9	25.2
	22年	51.3	47.6	40.6	38.5	36.9	41.3	41.5
B. 文字や数は子どもが関心をもつようになってから教えるのがよい	10年	59.1	65.6	70.8	78.0	78.6	84.5	76.7
	15年	51.5	62.4	70.4	76.9	79.0	77.1	73.4
	22年	48.7	52.4	59.4	61.5	63.1	58.7	58.5

注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 8対の項目のうち2対の項目を表示。
 注3) 無回答・不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注4) 子どもの年齢別の人数は以下のとおりである。

		(人)						
		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
10年	319	538	479	537	561	494	503	
15年	268	588	564	594	581	629	614	
22年	310	620	620	620	620	620	620	

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

● 「自分の生き方も大切にしたい」は、専業主婦の母親で増加

母親の就業状況別の経年変化を図表2-1-3にまとめた。「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」は、専業主婦において意識が高まっており(15年44.6%→22年60.5%)、母親の就業形態による差は縮まっている。専業主婦において、自分の生き方も重視する傾向が増え、就業形態による差がほぼなくなったことから、母親全体の傾向になってきている。子育て観が変化した背景には、15年に比べて、女性の大学進学率や就業率が上昇しており、選択肢が広がるなかで、自分らしい生き方や働き方を求めていることがあるのではないだろうか。

● 「世間で名の通った大学に通ってほしい」「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と考える母親が増加

「世間で名の通った大学に通ってほしい」については、いずれの就業状況の母親でも増加傾向がみられた。とくに常勤の母親の選択率は、10年の31.5%から22年では44.4%と約13ポイント増加した。常勤の母親は、パートタイムや専業主婦の母親よりも増加率が大きく、子どもを有名大学に進学させたい志向が強まっている。文字や数を教える時期も、いずれの就業状況の母親でも「できるだけ早く教えるのがよい」と考える比率が増えている。とくに大学卒業(四年制大学・大学院)の常勤の母親で早期教育の意向が強い(ベネッセ教育総合研究所(2022)「第6回幼児の生活アンケートダイジェスト版」p.13)。

これらの母親の考え方の変化の背景には、母親の四年制大学を卒業した比率が高くなっていることから、自身の学歴が関連している可能性があるかと推測される。

図表2-1-3 母親の子育て観(母親就業状況別 経年比較)

		(%)		
		常勤	パートタイム	専業主婦
A. 子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	10年	64.4	58.2	50.4
	15年	67.8	56.3	44.6
	22年	66.1	62.6	60.5
B. 子どものためには、自分ががまんするのはしかたない	10年	35.0	40.3	49.3
	15年	32.0	43.7	55.2
	22年	33.9	37.4	39.5
A. 世間で名の通った大学に通ってほしい	10年	31.5	20.4	27.9
	15年	35.0	23.9	29.4
	22年	44.4	25.9	30.7
B. 大学進学や学校名にはこだわらない	10年	67.6	79.0	71.9
	15年	65.0	76.0	70.5
	22年	55.6	74.1	69.3
A. 文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい	10年	23.0	23.5	25.1
	15年	28.7	27.7	26.1
	22年	48.8	38.9	39.9
B. 文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるのがよい	10年	76.4	75.6	74.4
	15年	70.9	71.9	73.6
	22年	51.3	61.1	60.1

注1) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注2) 8対の項目のうち3対の項目を表示。
 注3) 無回答・不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 注4) 母親の就業状況別の人数は以下のとおりである。

(人)			
	常勤	パートタイム	専業主婦
10年	464	491	1,966
15年	695	579	1,981
22年	880	719	1,891

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。



第2節 子育てで力を入れていること

2010年以降、社会性、生活習慣に関する項目は上位をキープしている。子育てで力を入れていることをたずねると、多くの項目が2015年に比べて減少していた。一方で、数や文字を学ぶことは増加している。

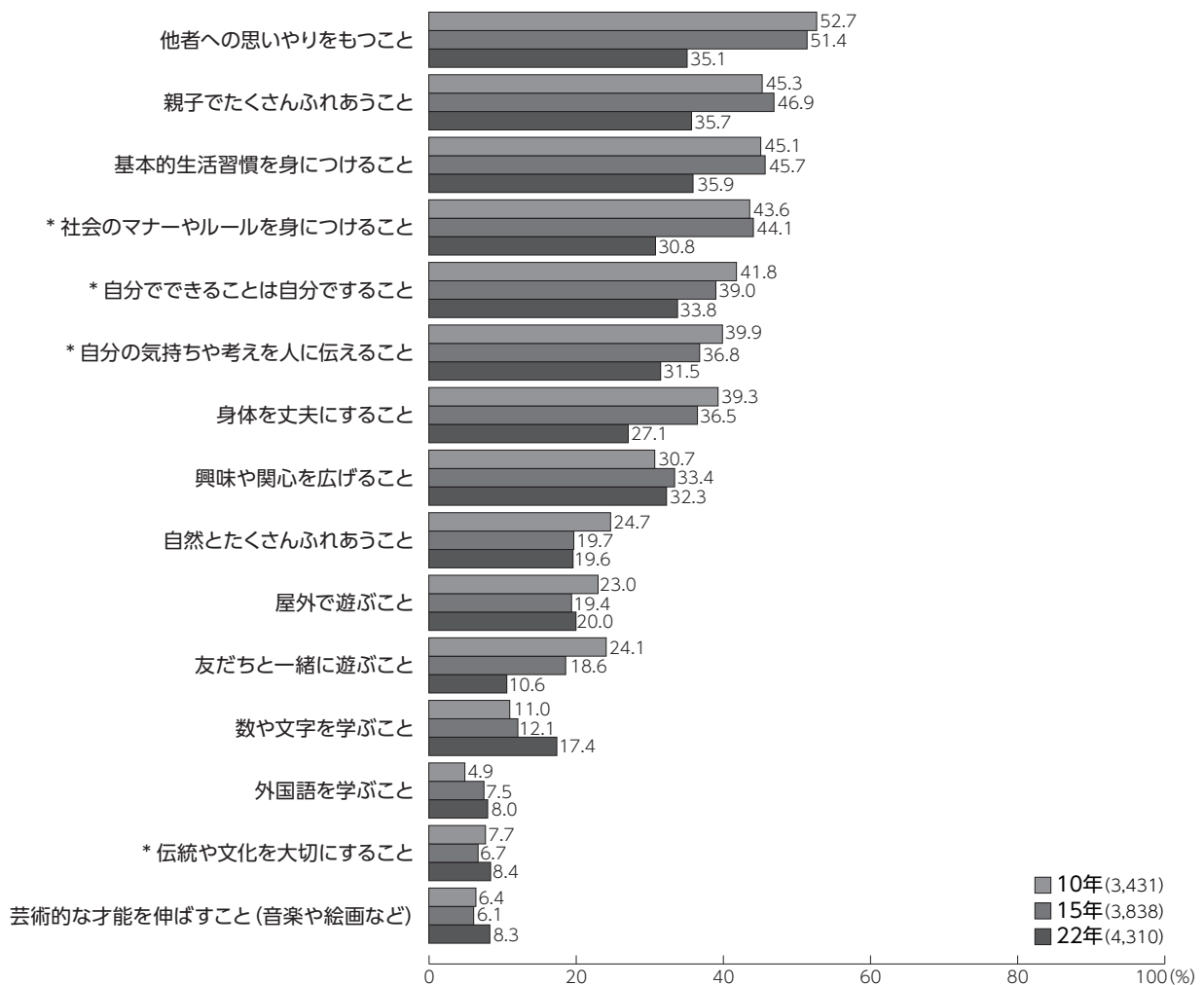
● 15年調査に比べて、全体的に子育てで「とても力を入れている」項目は減少している。一方で、「数や文字を学ぶこと」は増加

ここでは、母親たちが今、どのようなことに力を入れて子育てをしているのかについて経年比較をする。図表2-2-1は母親が子育てで力を入れていることについて

て、「とても力を入れている」と答えた比率の12年間の変化を示したものである。

全体的な変化として、子育てで「とても力を入れている」項目は減少している。7年前に比べて10ポイント以上減少している項目は、「他者への思いやりをもつこと」(15年51.4%→22年35.1%)、「親子でたくさんふれあうこと」(15年46.9%→22年35.7%)、「社会のマ

図表2-2-1 子育てで力を入れていること (経年比較)



注1) 「とても力を入れている」の%。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) *は10年調査以降の項目。
 注4) ()内は人数。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

ナーやルールを身につけること」(15年44.1%→22年30.8%)であった。就業する母親が増えて忙しくなっていることや、コロナ禍のため他者との距離をとるかかわりが多くなったこともあり、「とても」と回答する割合が減ったのではないかと考えられる。

経年でみると、全体的に減少しているものの、この12年間で他者への思いやりや社会性、生活習慣に力を入れる比率は一貫して上位を維持している。

一方、全体的に減少しているなかで、5ポイント以上増加したのは、「数や文字を学ぶこと」(15年12.1%→22年17.4%)であった。前節で示したように、早期教育傾向が増えていることから、数や文字を学ぶことに力を入れていることがわかる。

●「屋外で遊ぶこと」「身体を丈夫にすること」は性別による差が縮まる

次に、図表2-2-2をもとに、子どもの性別での経年変化をみていくと、「屋外で遊ぶこと」と「身体を丈夫にすること」の項目で性別による差が縮まっていた。

「屋外で遊ぶこと」は10年では男子の方が6.1ポイント(男子26.0%、女子19.9%)高かったが、22年ではその差は1.2ポイント(男子20.6%、女子19.4%)に縮

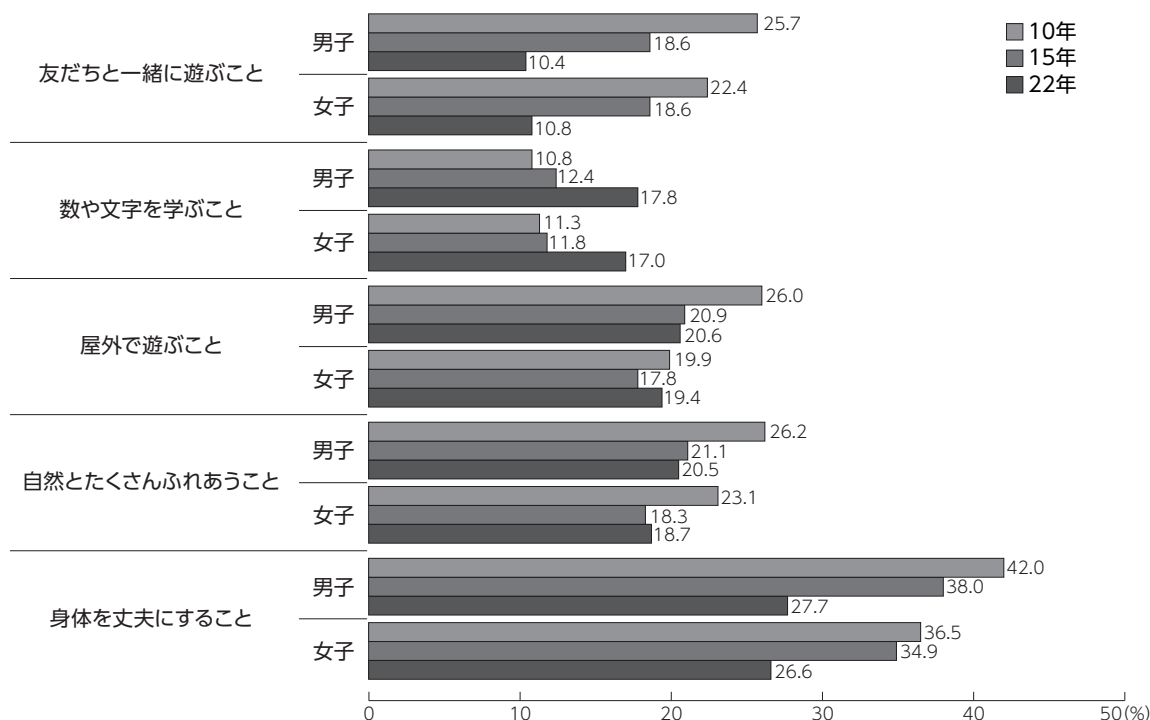
まっている。「身体を丈夫にすること」は10年では男子の方が5.5ポイント(男子42.0%、女子36.5%)高かったが、22年では1.1ポイント(男子27.7%、女子26.6%)の差となった。

コロナ禍により家で過ごす時間が多くなったことから性別を問わず「屋外で遊ぶこと」「身体を丈夫にすること」を保護者は促していると推察できる。また12年前に比べて、子育てにおけるジェンダーへの意識が変わってきているかもしれない。「男の子だから」、「女の子だから」といった性別による親の意識やかかわり方が変化しているかについては、今後も注視していきたい。

●「友だちと一緒に遊ぶこと」「親子でたくさんふれあうこと」は子どもの年齢を問わずに減少、「数や文字を学ぶこと」は5歳児と6歳児でとくに増加

図表2-2-3をもとに、子どもの年齢による経年変化をみていく。「友だちと一緒に遊ぶこと」は、10年、15年、22年のいずれの調査でも、子どもの年齢が高くなると、「とても力を入れている」比率も高くなる傾向がある。そして、いずれの年齢でも10年から22年にかけて減少する傾向がみられた。とくに15年から22年にかけての減少率が大きい。

図表2-2-2 子育てで力を入れていること (性別 経年比較)



注1) 「とても力を入れている」の%。
 注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。
 注3) 15項目のうち5項目を図示。
 注4) 分析人数は10年男子1,694人、女子1,737人、15年男子1,890人、女子1,948人、22年男子2,015人、女子2,015人。
 注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

「数や文字を学ぶこと」も、子どもの年齢が高くなると力を入れる比率が高くなる傾向がある。いずれの年齢でも「とても力を入れている」比率が経年で高くなっているが、とくに5歳児では、15年14.4%、22年23.4%と7年間で9ポイント増加した。また6歳児も、15年16.7%、22年25.5%と7年間で8.8ポイント増加した。

他に「屋外で遊ぶこと」「自然とたくさんふれあうこと」

は、7年前に比べて0歳児で増えている。「親子でたくさんふれあうこと」は15年に比べてどの年齢でも減少傾向にあるが、特に0歳児は14.1ポイント、1歳児は15.2ポイントも減少している。今回の結果から、子育てで力を入れていることは、母親の就業率や保育園児の増加、ジェンダー意識の浸透といった時代の変化によるものもあるが、コロナ禍による影響も多分にあるであろう。

図表2-2-3 子育てで力を入れていること (子どもの年齢別 経年比較)

		(%)						
		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
友だちと一緒に遊ぶこと	10年	14.7	20.3	24.3	26.3	27.3	25.0	26.2
	15年	10.8	15.0	17.1	18.2	19.6	21.5	24.2
	22年	5.8	6.5	8.7	11.6	10.8	11.6	16.8
数や文字を学ぶこと	10年	5.8	7.8	9.4	10.2	13.7	12.4	15.4
	15年	10.1	9.5	10.0	10.4	12.6	14.4	16.7
	22年	12.6	11.5	15.2	13.9	17.4	23.4	25.5
屋外で遊ぶこと	10年	16.5	24.4	27.7	25.8	21.2	20.3	21.9
	15年	10.4	21.2	22.4	22.1	19.1	16.3	19.4
	22年	16.5	22.7	23.4	22.1	18.2	15.8	19.4
自然とたくさんふれあうこと	10年	20.6	29.0	26.7	24.4	24.3	23.3	22.5
	15年	15.4	23.1	19.4	22.1	19.5	18.1	18.2
	22年	20.0	22.9	22.7	18.7	18.9	15.3	18.9
親子でたくさんふれあうこと	10年	65.3	59.4	52.9	43.8	39.9	35.3	29.7
	15年	74.7	65.8	51.2	47.6	38.7	33.9	30.1
	22年	60.6	50.6	42.4	34.8	26.6	21.9	25.5
基本的な生活習慣を身につけること	10年	37.6	41.3	41.8	44.9	47.6	49.5	49.5
	15年	40.0	45.8	40.4	43.8	46.4	51.3	49.5
	22年	36.8	34.4	36.6	33.2	35.0	37.1	38.4

注1) 「とても力を入れている」の%。

注2) 0歳6か月～6歳11か月の子どもをもつ母親の回答を分析。

注3) 15項目のうち6項目を表示。

注4) 子どもの年齢別の人数は以下のとおりである。

(人)							
	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児
10年	319	538	479	537	561	494	503
15年	268	588	564	594	581	629	614
22年	310	620	620	620	620	620	620

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。



第3節 子どもの進学に対する期待

子どもの進学に対する期待は、この7年間で性差はほぼなくなり、7割強の母親が、子どもに「四年制大学卒業以上」の学歴を期待している。

● 7割強の母親が、子どもに「四年制大学卒業以上」の学歴を期待している

図表2-3-1は、母親が子どもをどの学校段階まで進学させたいと思っているかについて、経年比較を行ったものである。これをみると、95年から00年は、「高校卒業まで」の比率が増加し(95年7.3%→00年14.5%)、「四年制大学卒業まで」の比率が減少したが(95年70.0%→00年61.8%)、00年から15年までは一貫して「高校卒業まで」の比率が減少し(00年14.5%→05年13.4%→10年9.1%→15年5.9%)、「四年制大学卒業まで」の比率が増加していた(00年61.8%→05年64.5%→10年66.7%→15年73.4%)。しかし22年では「高校卒業まで」の比率が12.0%となりこの7年間で6.1ポイント増加、対して「四年制大学卒業まで」の比率が71.6%となりこの7年間で1.8ポイント減少した。

また、「高等専門学校・短期大学卒業まで」は95年か

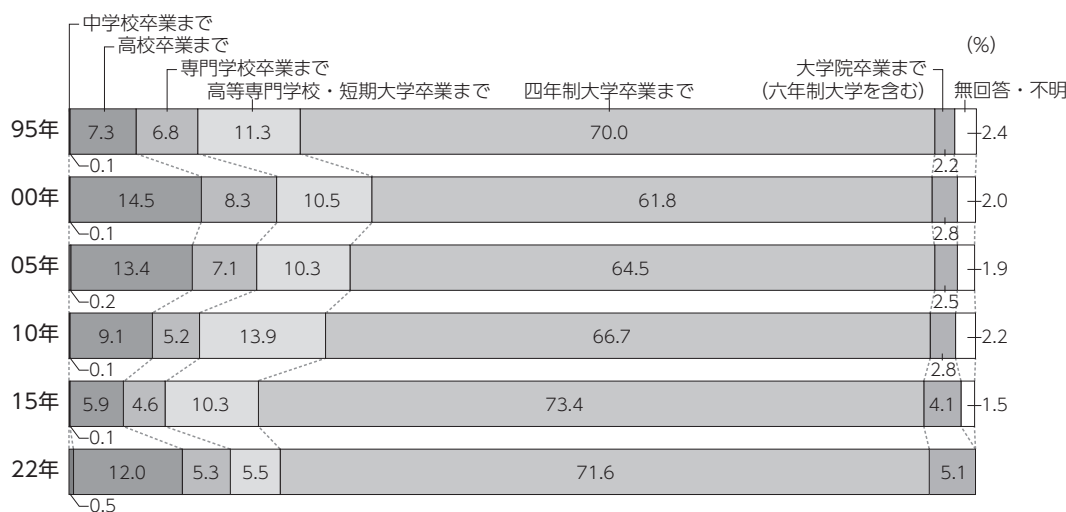
ら15年まで10%前後で横ばいだったが、22年では5.5%となっており、この7年間で4.8ポイント減少した。

「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」を期待する比率も年々増加しており、05年以降は2.5%→10年2.8%→15年4.1%→22年5.1%となっている。

● 大学卒業以上の学歴を望む比率の性差は、この7年間で11.4ポイント縮まった

次に、進学に対する期待が、子どもの性別によってどう異なるかをみてみよう。図表2-3-2をみると、女子に対して「短大・高等専門学校卒業まで」を望む比率は95年23.1%→00年21.3%→05年20.9%→10年23.8%→15年17.8%→22年7.3%となり、この27年間で15.8ポイント減少した。一方で、女子に「四年制大学卒業まで」を期待する比率は、95年56.4%→00年50.1%→05年52.0%→10年56.8%→15年66.9%→22年69.9%となり、00年以降一貫して上昇している。

図表2-3-1 子どもの進学に対する期待 (経年比較)

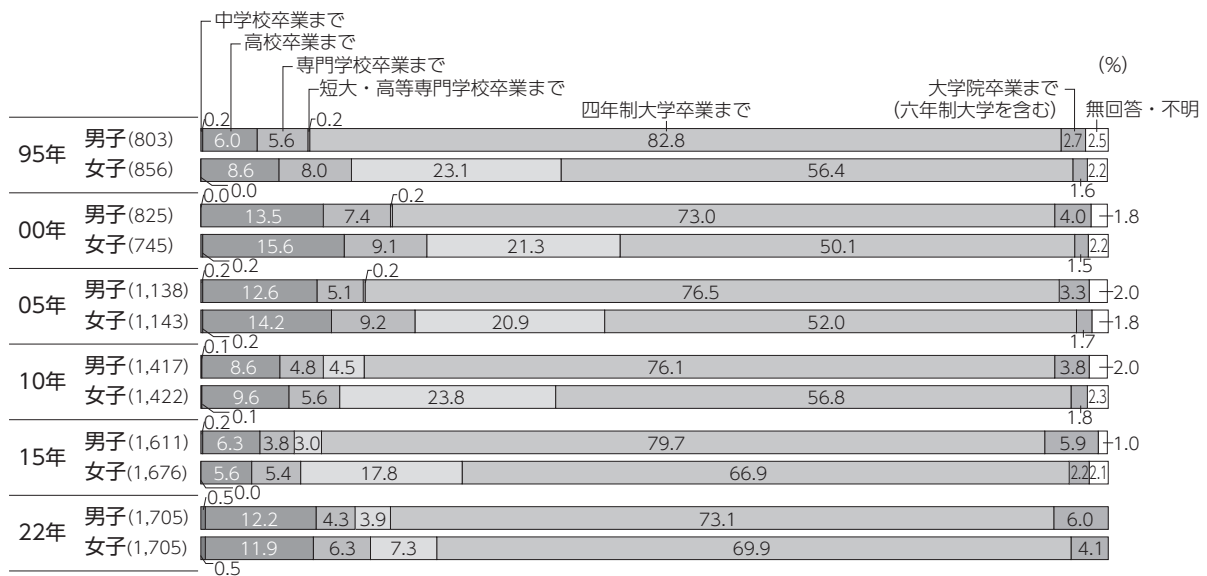


注1) 95年、00年、05年調査では、「高等専門学校卒業まで」についてはたずねておらず、10年、15年調査から「高等専門学校・短大卒業まで」としてたずねている。22年調査は、「高等専門学校卒業まで」「短大卒業まで」はわけてたずねている。経年比較のため、本分析では「高等専門学校・短期大学卒業まで」とまとめて数値を算出している。

男子についても00年以降、「四年制大学卒業まで」を期待する比率は高くなっており、95年82.8%→00年73.0%→05年76.5%→10年76.1%→15年79.7%であった。しかし22年では73.1%となりこの7年間で6.6ポイント減少した。あわせて「高校卒業まで」を望む男子の比率が15年は6.3%であったが22年は12.2%となり5.9ポイント増加した。大学卒業以上の学歴（「四年制大学卒業まで」と「大学院卒業まで（六年制大学を含む）」

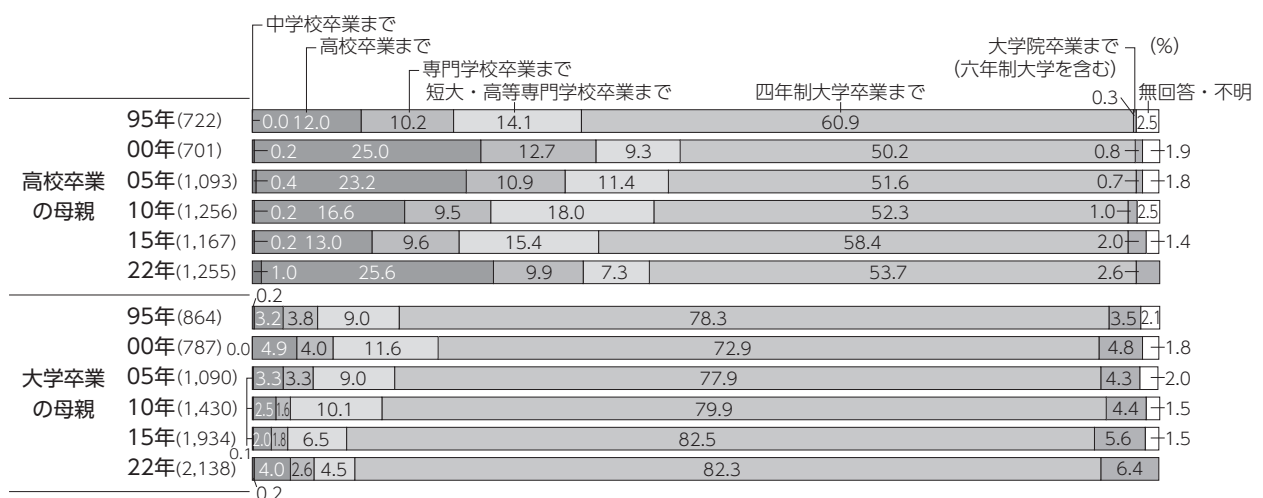
の合算）を望む比率の性差（男子－女子）については、95年から27.5ポイント差→00年25.4ポイント差→05年26.1ポイント差→10年21.3ポイント差→15年16.5ポイント差→22年5.1ポイント差と減少している。00年以降、女子に高学歴を期待する比率が調査をするたびに高くなってきているため、性差は徐々に縮まっていることがうかがえる。

図表2-3-2 子どもの進学に対する期待（性別・経年比較）



注1) 95年、00年、05年調査では、「高等専門学校卒業まで」についてはたずねておらず、10年、15年調査から「高等専門学校・短大卒業まで」としてたずねている。22年調査は、「高等専門学校卒業まで」「短大卒業まで」はわけてたずねている。経年比較のため、本分析では「高等専門学校・短期大学卒業まで」とまとめて数値を算出している。
 注2) () 内は人数。

図表2-3-3 子どもの進学に対する期待（母親の学歴別・経年比較）



注1) 95年、00年、05年調査では、「高等専門学校卒業まで」についてはたずねておらず、10年、15年調査から「高等専門学校・短大卒業まで」としてたずねている。22年調査は、「高等専門学校卒業まで」「短大卒業まで」はわけてたずねている。経年比較のため、本分析では「高等専門学校・短期大学卒業まで」とまとめて数値を算出している。
 注2) 高校卒業の母親は、「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人、大学卒業の母親は、「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院（六年制大学を含む）」を卒業した人を表す。
 注3) () 内は人数。

● 「大学卒業の母親」は依然子どもへの高い学歴を期待している

次に、子どもの進学に対する期待が、母親の学歴によってどう異なるかをみてみよう（図表2-3-3）。「高校卒業の母親」（「中学校」「高等学校」「専門学校」を卒業した人）と「大学卒業の母親」（「高等専門学校」「短期大学」「四年制大学」「大学院（六年制大学を含む）」を卒業した人）とを比較すると、95年から22年まで一貫して、「高校卒業の母親」は「大学卒業の母親」と比較して、子どもに「高校卒業まで」「専門学校卒業まで」の学歴を望む比率が高く、大学卒業以上の学歴を望む比率が低い。

子どもに大学卒業以上の学歴を望む「大学卒業の母親」は15年88.1%→22年88.7%とほぼ横ばい状態に対して、「高校卒業の母親」では15年60.4%→22年56.3%と4.1ポイント減少した。

22年の「高校卒業の母親」では「四年制大学卒業まで」に次いで比率が高かった項目は「高校卒業まで」であり、95年12.0%→22年25.6%とこの27年間で13.6ポイント増加した。

22年の「大学卒業の母親」では「大学院卒業まで（六年制大学を含む）」であり、95年3.5%→22年6.4%と2.9ポイント増加した。15年までは「四年制大学卒業まで」に次いで比率が高かった項目は「短大・高等専門学校卒業まで」であったことから、「大学卒業の母親」は子どもへ高い学歴を期待している傾向がうかがえる。

大学卒業以上の学歴を望む比率の差（「大学卒業の母親」－「高校卒業の母親」）は、95年20.6ポイント差→00年26.7ポイント差→05年29.9ポイント差→10年31.0ポイント差→15年27.7ポイント差→22年32.4ポイント差と変化しており、この27年間のうちでもっとも差が開いた。



第4節 教育費

ひとりあたりの教育費は「1,000円未満」が増加している。また保育・幼児教育の無償化の導入により、幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用で減少傾向がみられた。

●ひとりあたりの教育費は「1,000円未満」が増加

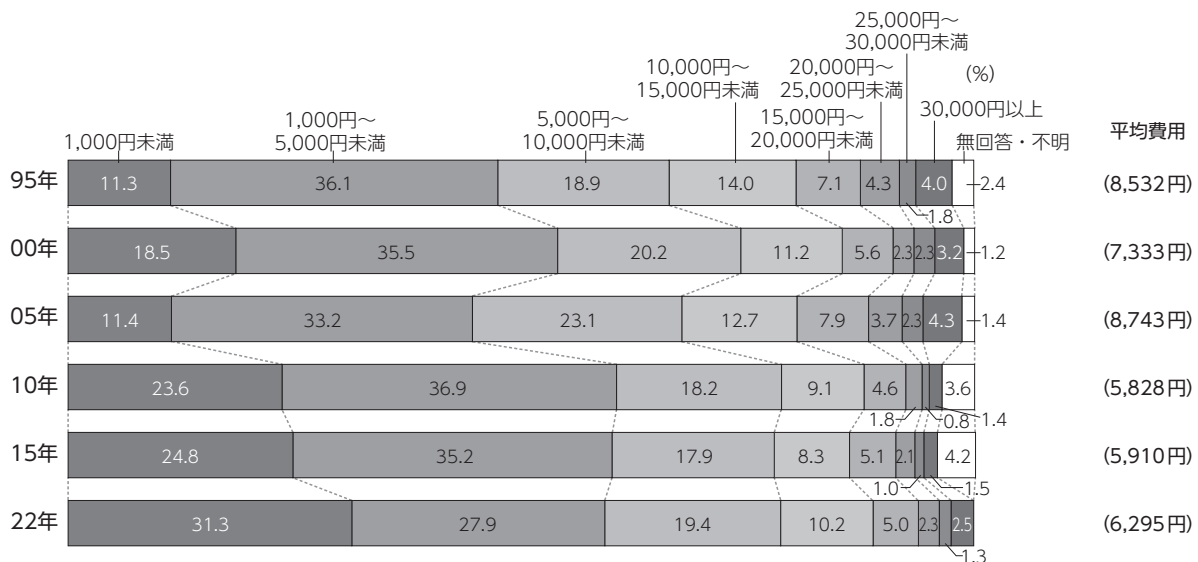
子ども1人で1か月あたりにかかる教育費はどれくらいか。「塾・通信教育・習い事・絵本・玩具などにかかる費用（幼稚園・保育園などで有料で習っているものは除く）」と「幼稚園・保育園にかかる費用（保育料や、幼稚園・保育園などで有料で習っている習い事の費用を含む）」についてたずねた。（なお、質問文は、調査回によって、若干の変更を行っている。詳細は図表2-4-1の注2を参照）。

図表2-4-1をみると、習い事などにかかる教育費は「1,000円～5,000円未満」と「5,000円～10,000円未満」の層が大半を占める。この層の比率は、95年が55.0%、00年が55.7%、05年が56.3%、10年が55.1%、15年が53.1%、22年が47.3%であり、05年

以降減少傾向にある。一方、「1,000円未満」は、95年が11.3%、00年が18.5%、05年が11.4%、10年が23.6%、15年が24.8%、22年が31.3%であり、この7年間で6.5ポイント増加した。また、10,000円以上は、95年が31.2%、00年が24.6%、05年が30.9%、10年が17.7%、15年が18.0%、22年が21.3%であり、この7年間で3.3ポイント増加した。05年から10年にかけて習い事などにかかる教育費は大きく減少傾向になったが、徐々に増えつつある。

「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円のように置き換えて平均を算出すると、05年が8,743円相当だったのが、10年には5,828円相当と3,000円近く減少した。22年には6,295円相当となり、この7年間で385円増加した。

図表2-4-1 ひとりあたりの教育費（経年比較）



注1) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無回答・不明の人は分析から除外している。

注2) 10年以降は、「対象のお子様の塾・通信教育・習い事・絵本・玩具などにかかる費用はいくらですか。（幼稚園・保育園などで有料で習っているものは除きます）」とたずねている。

95年、00年、05年調査は「幼稚園・保育園にかかる費用（就園補助等も含めて）を除いた、1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用を教えてください。」とたずねている（ただし、95年は、質問文に「（就園補助等も含めて）」と「絵本・玩具」の部分は含まない）。

注3) 1歳6か月以上の母親の回答のみを分析。

●高年齢で習い事にかかる教育費は増加

子どもの就園状況により、習い事などの教育費に違いはあるか。図表2-4-2をみると、22年調査では、低年齢で未就園児と保育園児で差はほとんどみられなかった。一方、高年齢で幼稚園児と保育園児に差がみられた。「1,000円未満」と「1,000円～5,000円未満」を合わせた比率は、幼稚園児が43.1%、保育園児が51.1%であり、平均費用は幼稚園児が8,332円相当で、保育園児が7,712円相当だった。

15年と22年での平均費用の変化をみると、低年齢では大きな増額はみられなかった。一方、高年齢では幼稚園児、保育園児ともに費用がやや高くなった。平均費用を比べると幼稚園児では15年が7,839円相当、22年が8,332円相当であり、保育園児では15年が6,779円相当、22年が7,712円相当だった。高年齢の幼稚園児、保育園児ともに習い事をしている比率が増加傾向にあることと関連すると思われる。

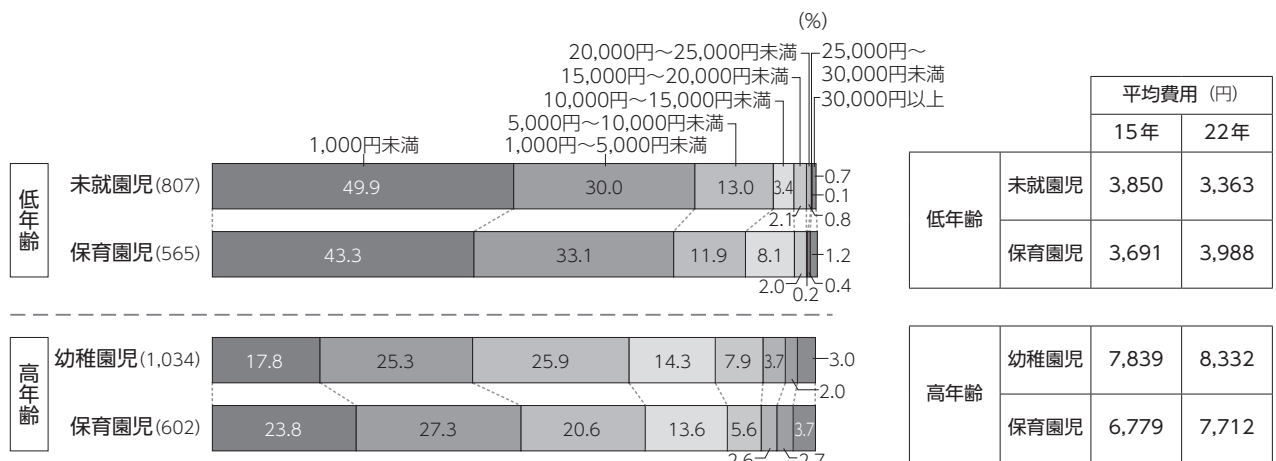
●幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用は減少

幼稚園・保育園にかかる費用をみよう。保育園について、低年齢（1歳6か月～3歳11か月）と高年齢（4歳0か月～6歳11か月）で比較した。

図表2-4-3をみると、低年齢でもっとも多かった項目は、「5,000円未満」で38.0%だった。保育園にかかる平均費用は17,503円相当だった。高年齢でもっとも多かった項目は「5,000円未満」で40.3%だった。保育園にかかる平均費用は10,096円相当であり、低年齢に比べて7,000円ほど費用が抑えられていた。

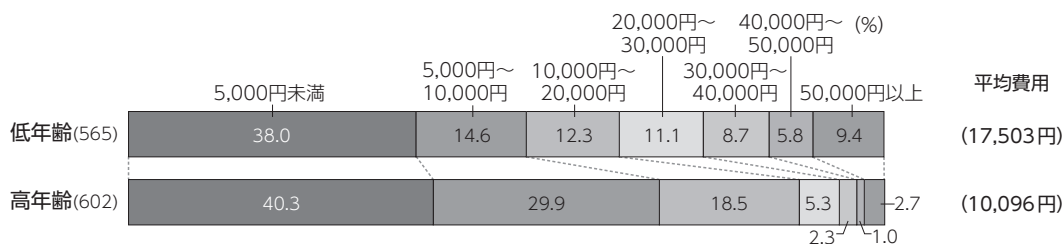
次に、園にかかる費用を、15年と22年での幼稚園児と保育園児で比較したものが図表2-4-4である。まず22年をみると、幼稚園児で多くを占めた項目が、「5,000円～10,000円未満」で34.7%、次いで多かった「5,000円未満」が24.8%で、合わせて59.5%だった。また、幼稚園にかかる平均費用は12,117円相当だった。一方、保育園児の場合、多くを占めた項目は「5,000円

図表2-4-2 ひとりあたりの教育費（子どもの年齢区分別・就園状況別 22年）



注1) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無回答・不明の人は分析から除外している。
 注2) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。
 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注3) () 内は人数。

図表2-4-3 保育園にかかる費用（子どもの年齢区分別・就園状況別 22年）



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無回答・不明の人は分析から除外している。
 注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。
 低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。
 高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注4) () 内は人数。

未満」の40.3%であり、「5,000円～10,000円未満」が29.9%で、合わせて70.2%だった。保育園にかかる平均費用は10,096円相当であり、幼稚園に比べると2,000円ほど費用が抑えられている。

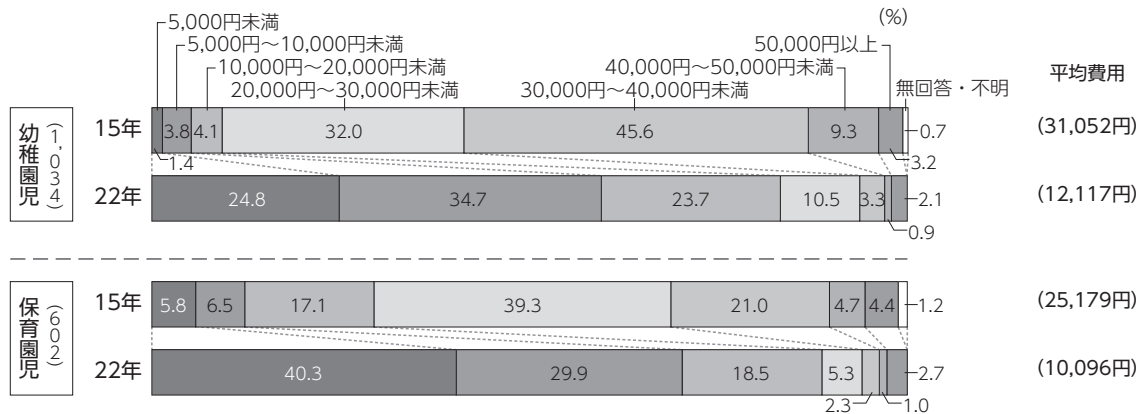
高年齢での園にかかる費用を15年と22年での変化からみると、30,000円以上の比率は、幼稚園で15年58.1%から22年6.3%で差51.8ポイント、保育園で15年30.1%から22年6.0%で差24.1ポイントと大きく減少した。平均費用は、幼稚園児では15年が31,052円相当、22年が12,117円相当と18,935円相当大きく減少

した。また保育園児でも15年が25,179円、22年が10,096円と15,083円相当費用が抑えられていた。幼稚園児、保育園児ともに園にかかる費用は大きく減少する傾向がみられた。

●習い事などの教育費は、世帯年収と関連がみられる

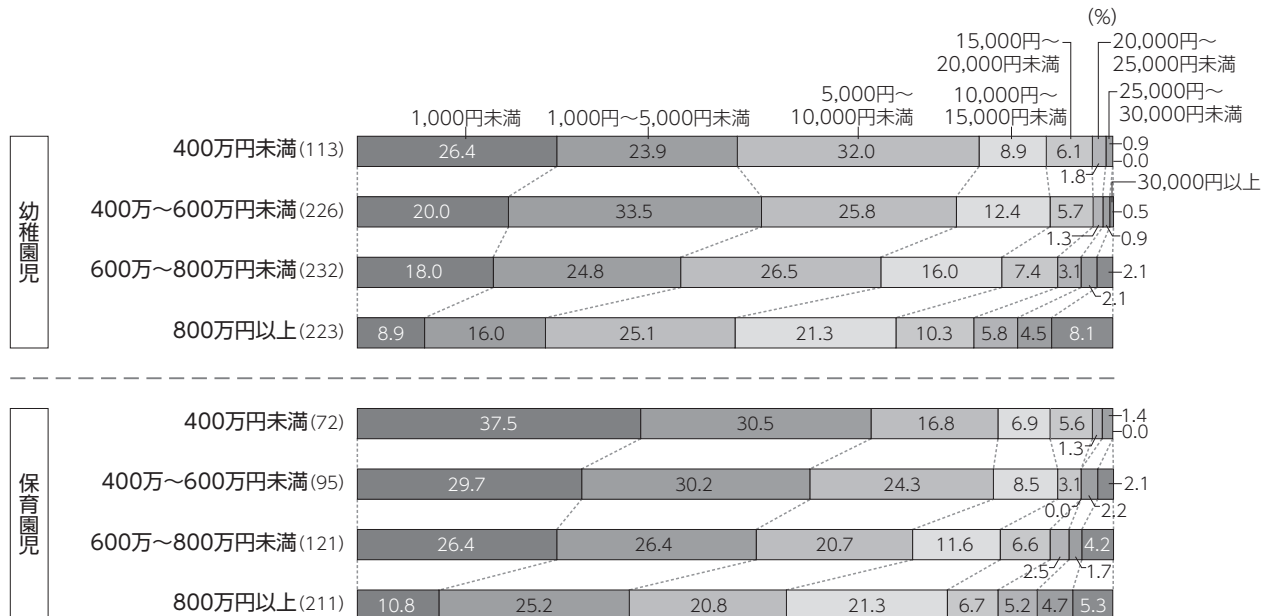
子育てや教育にかかる費用を家計からどれくらい支出するかは、家族にとって大きな問題である。そこで、習い事などの教育費・幼稚園や保育園にかかる費用と世帯

図表2-4-4 園にかかる費用（就園状況別（高年齢） 経年比較）



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 高年齢は、4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注3) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無回答・不明の人は分析から除外している。
 注4) ()内は人数。

図表2-4-5 ひとりあたりの教育費（就園状況別（高年齢）・世帯年収別 22年）



注1) 高年齢は、4歳0か月～6歳11か月の幼児。
 注2) 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無回答・不明の人は分析から除外している。
 注3) 「1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用はいくらですか。(幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます)」とたずねている。
 注4) ()内は人数。

年収との関係について分析した。ここでは、幼稚園や保育園に就園している比率の高い高年齢についてみていきたい。

図表2-4-5は習い事などの教育費を就園状況別、世帯年収別でみたものである。これをみると、就園状況にかかわらず、世帯年収が高いほど、習い事などの教育費を多く支出していることがわかる。

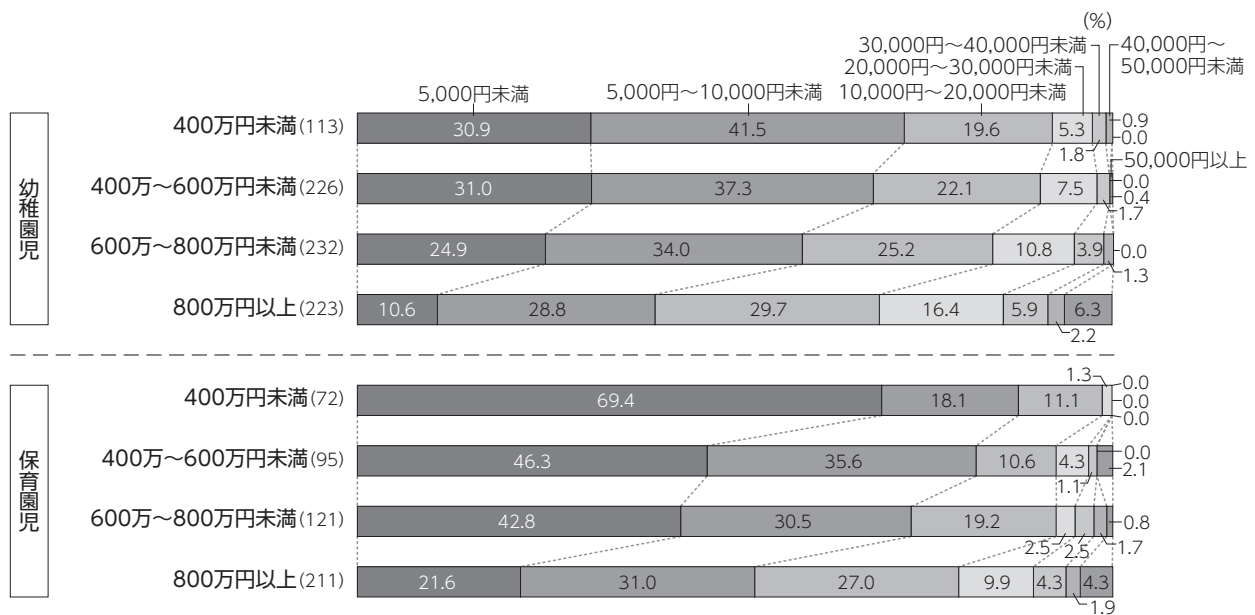
次に、図表2-4-6は園にかかる費用を就園状況別に世帯年収でみたものである。これをみると、幼稚園児・保育園児ともに、世帯年収が上がるほど園にかかる費用を多く支出していることがわかる。

●教育費の負担感は増加傾向、22年では約6割が負担に感じている。とくに、高年齢の幼稚園児の負担感が高い

ここまで、習い事や園などの教育費の状況についてみてきた。では教育費の支出について保護者はどのように感じているだろうか。ここでは母親の回答のみ分析する。

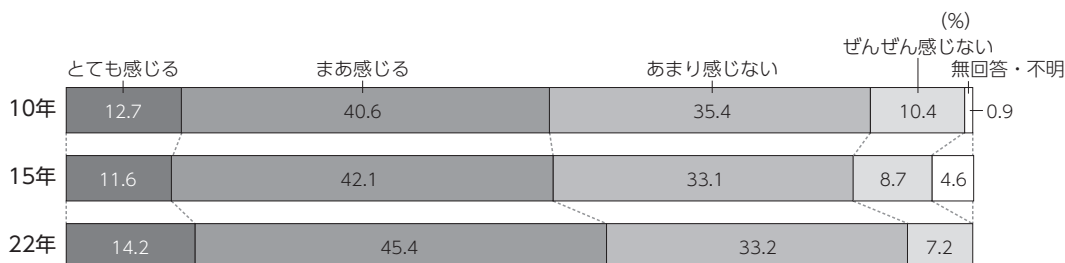
教育費の負担感について、過去3回の調査を比べたものが図表2-4-7である。これをみると教育費の負担感は少し増えている。22年では、負担を「とても感じる」が14.2%、「まあ感じる」が45.4%であり、合わせて

図表2-4-6 園にかかる費用 (就園状況別 (高年齢)・世帯年収別 22年)



注1) 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 注2) 高年齢は、4歳0か月~6歳11か月の幼児。
 注3) 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円~10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無回答・不明の人は分析から除外している。
 注4) () 内は人数。

図表2-4-7 教育費の負担感 (経年比較)

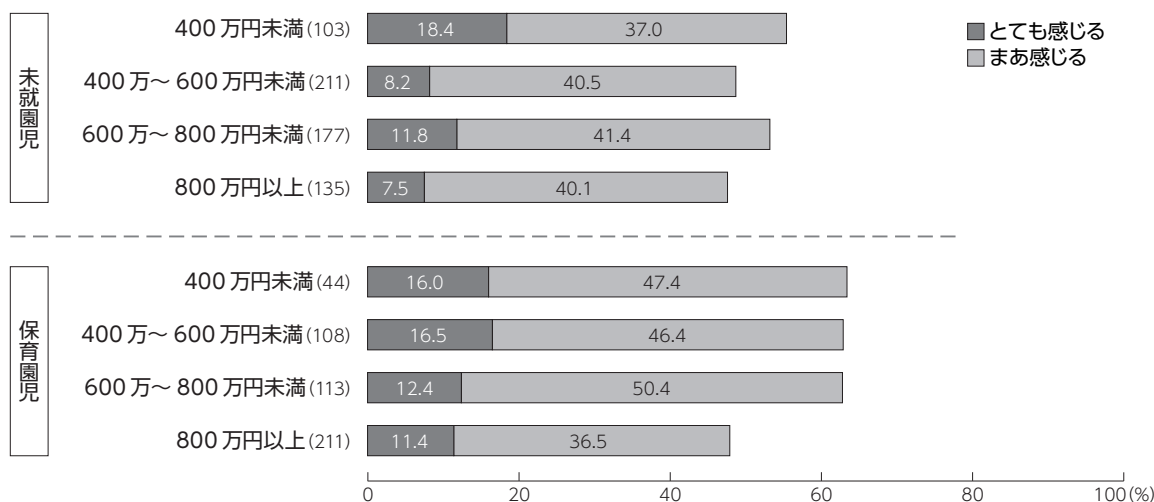


59.6%と、約6割の母親が負担感を感じているといえよう。

さらに、低年齢と高年齢で就園状況別に教育費の負担感を図表2-4-8、9で表している。図表2-4-8をみると、低年齢の未就園児で負担を「感じる(とても+まあ)」比率は、世帯年収が「400万円未満」の家庭がもっとも高かった。保育園児での「感じる(とても+まあ)」比率は、世帯年収が「400万円未満」で63.4%、「400万~600万円未満」で62.9%、「600万~800万円未満」で62.8%、「800万円以上」で47.9%であり、800万円未満では大きな差が見られなかった。高年齢を

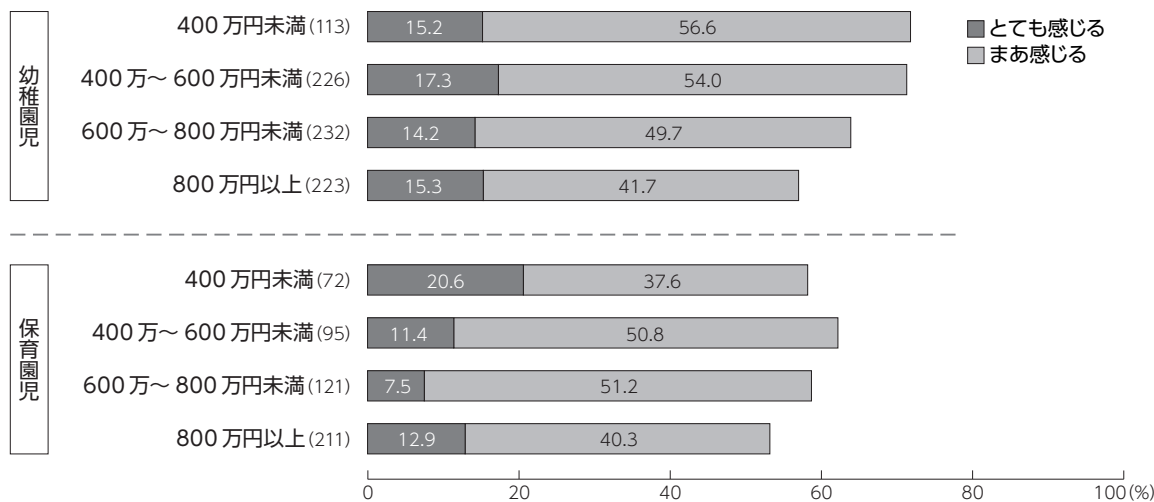
みる(図表2-4-9)と、負担を「感じる(とても+まあ)」比率は、保育園児の場合、世帯年収が「400万円未満」で58.2%、「400万~600万円未満」で62.2%、「600万~800万円未満」で58.7%、「800万円以上」で53.2%であり、「400万~600万円未満」がもっとも高かった。しかし、「とても感じる」の比率だけをみると「400万円未満」がもっとも高いことがわかる。一方、幼稚園児の場合、世帯年収が「400万円未満」で71.8%、「400万~600万円未満」で71.3%、「600万~800万円未満」で63.9%、「800万円以上」で57.0%であり、世帯年収が高くなるほど負担感は減少していた。

図表2-4-8 教育費の負担感(就園状況別(低年齢)・世帯年収別 22年)



注1) 低年齢は、1歳6か月~3歳11か月の幼児。
注2) ()内は人数。

図表2-4-9 教育費の負担感(就園状況別(高年齢)・世帯年収別 22年)



注1) 高年齢は、4歳0か月~6歳11か月の幼児。
注2) ()内は人数。



第5節 母親の子育て意識

2015年から2022年にかけて、肯定的な感情は減り、否定的な感情が増えている。肯定的感情の比率はどの項目も高いものの、いずれの項目も前回から5ポイント以上も下がっている。また未就園児をもつ母親は、育児への否定的感情が高い傾向にある。

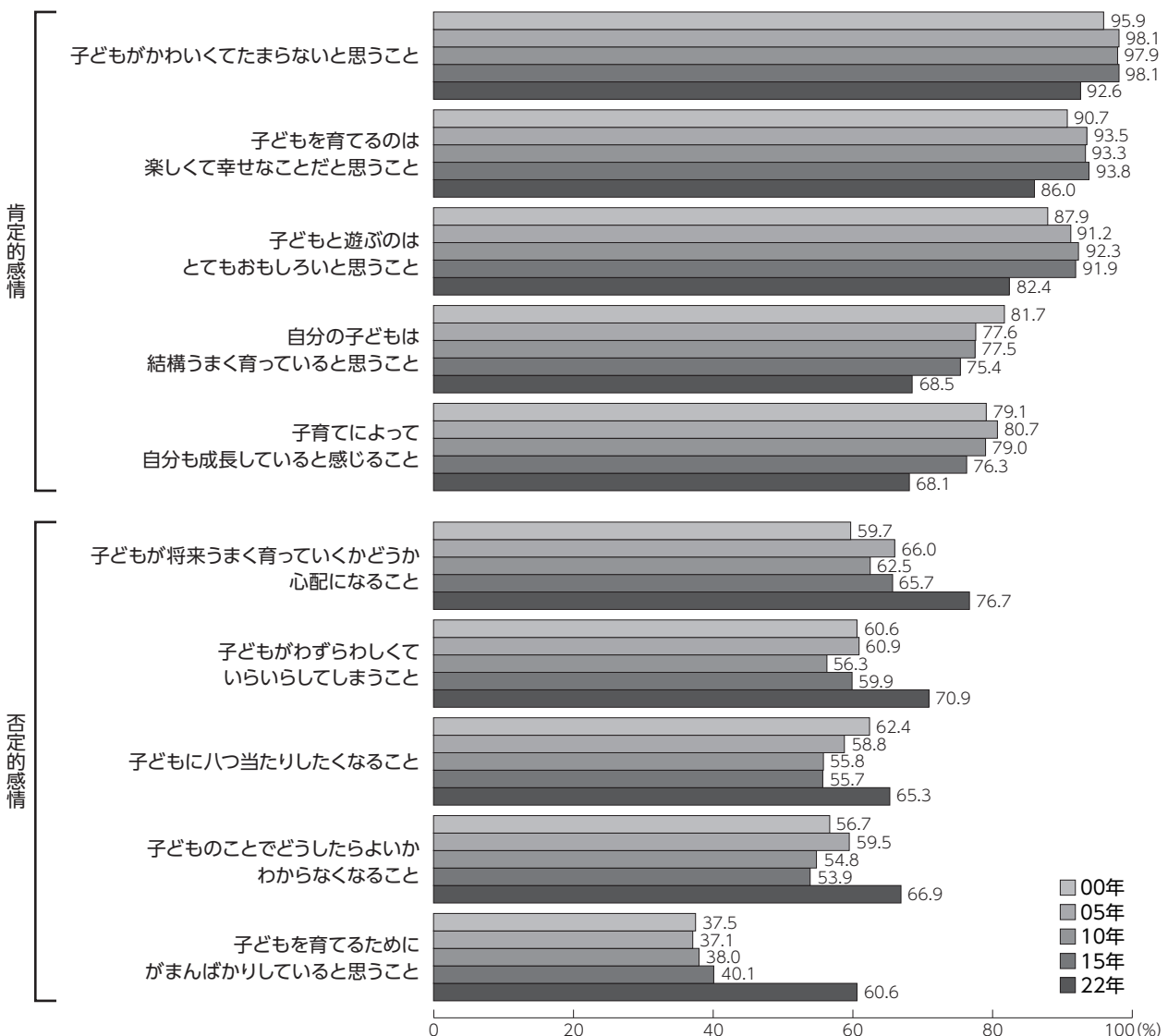
●子育てへの肯定的感情は高いが、子どもの育ちへの不安が高まっている

図表2-5-1は、母親の子育て意識に関して、00年からの22年間における経年変化を表したものである。

子育てへの肯定的感情の比率はどの項目も8～9割と高いものの、いずれの項目も前回から5ポイント以上も

下がっている。「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」については、22年前と比較して13ポイント程度減少しており、子どもの発達に関する不安は年々高まっていることがわかる。さらに15年まで上位5項目が子育てへの肯定的な感情を占めていたが、今回の調査では上位5項目のうち3項目が肯定的感情であり、残りの2項目は否定的感情となっている。

図表2-5-1 母親の子育て意識 (経年比較)



注1) 「よくある+ときどきある」の%。

注2) 本分析では、小数点第1位以下も足し合わせて算出している。そのため、小数点第1位で算出した第5回報告書と数値が異なる場合もある。

また、下位3項目は子育てへの否定的感情に関する項目であるが、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」については00年が37.5%、05年が37.1%、10年が38.0%、15年が40.1%とほぼ横ばいだったが、22年が60.6%であり、この7年間で20ポイント以上増加した。

●母親の就業状況にかかわらず、育児への否定的感情は高まっている

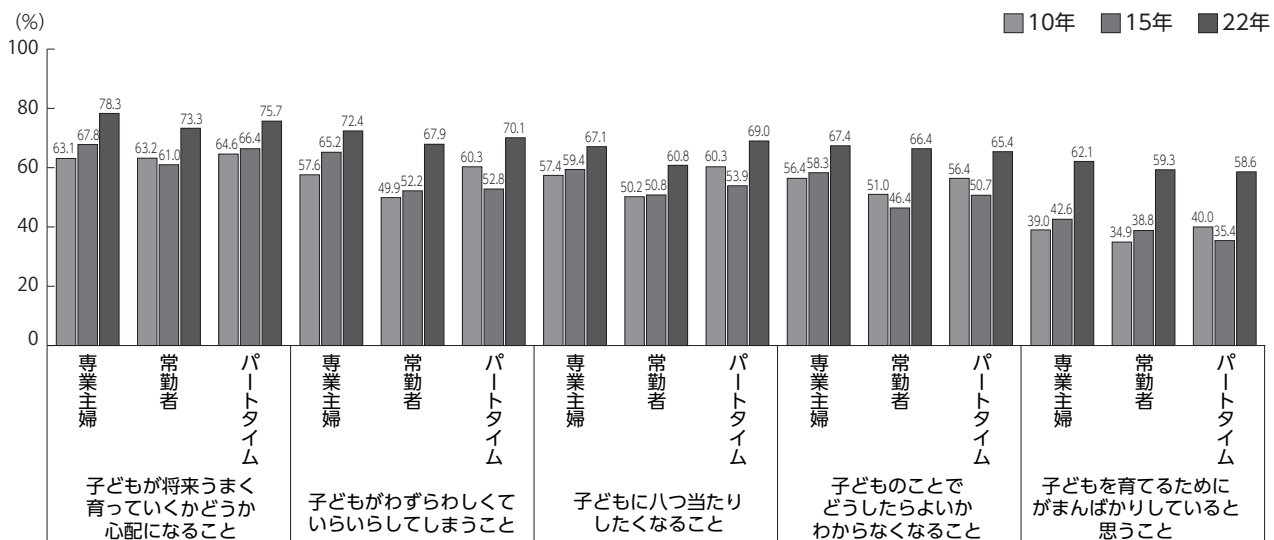
図表2-5-2は、子育て意識について、母親の就業状況別に、10年から22年までの12年間の経年比較

をした結果を表したものである。

就業状況にかかわらず、育児への否定的感情は高まっている。専業主婦では、否定的感情に関する5項目すべてにおいて年々増加しており、どの項目においても約6割を超えていた。

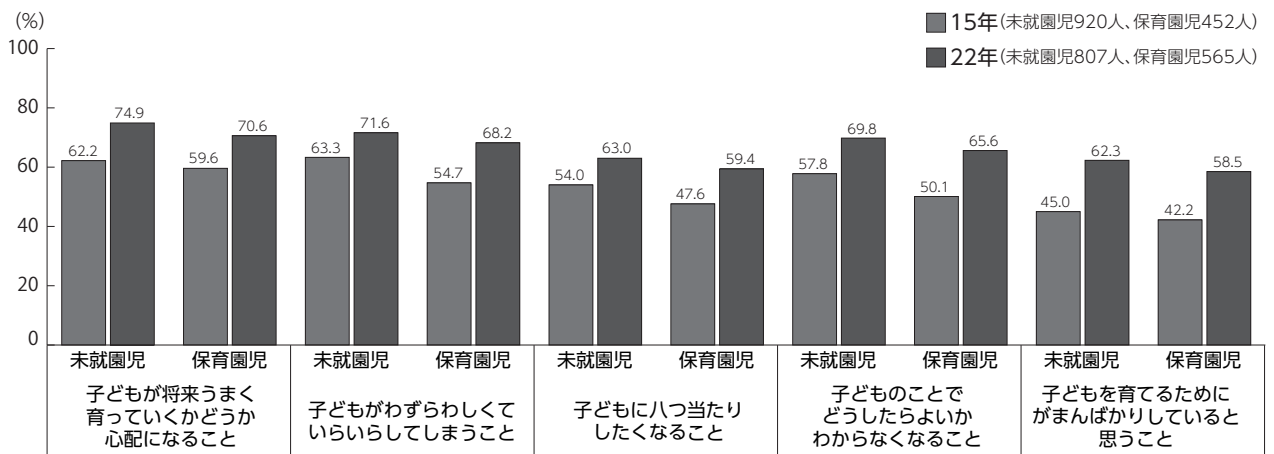
常勤者において変化があったのは、「子どもがわずらわしくていららしてしまうこと」、「子どものことどうしたらよいかわからなくなること」「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」といった項目であった。パートタイムにおいては10年から15年にかけて減少傾向だったが、22年では否定的感情に関する5項目すべてにおいて増加している。

図表2-5-2 母親の子育て意識（母親の就業状況別 経年比較）



注1) 「よくある+ときどきある」の%。
 注2) 本分析では、小数点第1位以下も足し合わせて算出している。そのため、小数点第1位で算出した第5回報告書と数値が異なる場合もある。
 注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。
 注4) 分析人数は10年（専業主婦1,608人、常勤者405人、パートタイム465人）、15年（専業主婦1,701人、常勤者639人、パートタイム556人）、22年（専業主婦1,615人、常勤者731人、パートタイム638人）。

図表2-5-3 母親の子育て意識（就園状況別（低年齢） 経年比較）



注1) 「よくある+ときどきある」の%。本分析では、小数点第1位以下も足し合わせて算出している。そのため、小数点第1位で算出した第5回報告書と数値が異なる場合もある。
 注2) () 内は人数。
 注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。
 注4) 子どもの年齢は、1歳6か月～3歳11か月。

●子どもが低年齢児である場合には、未就園児をもつ母親のほうが育児への否定的感情が強い傾向にある

図表2-5-3、4では、育児への否定的感情について、子どもの年齢による就園状況における違いに焦点をあて、15年から22年までの7年間の変化をまとめている。

図表2-5-3は、1歳6か月から3歳11か月までの低年齢児に絞って、未就園児か保育園児かにおいて比較した結果である。どの項目においても未就園児をもつ母親のほうが保育園児をもつ母親より育児への否定的感情が強い傾向にある。

また、未就園児・保育園児ともに5項目すべてにおいて増加傾向にあり、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」については15年調査より16ポイント以上増加している。

ここまでみてきたように、未就園児をもつ母親のほうが否定的感情は強く、こうした家庭への支援は引き続き必要である。

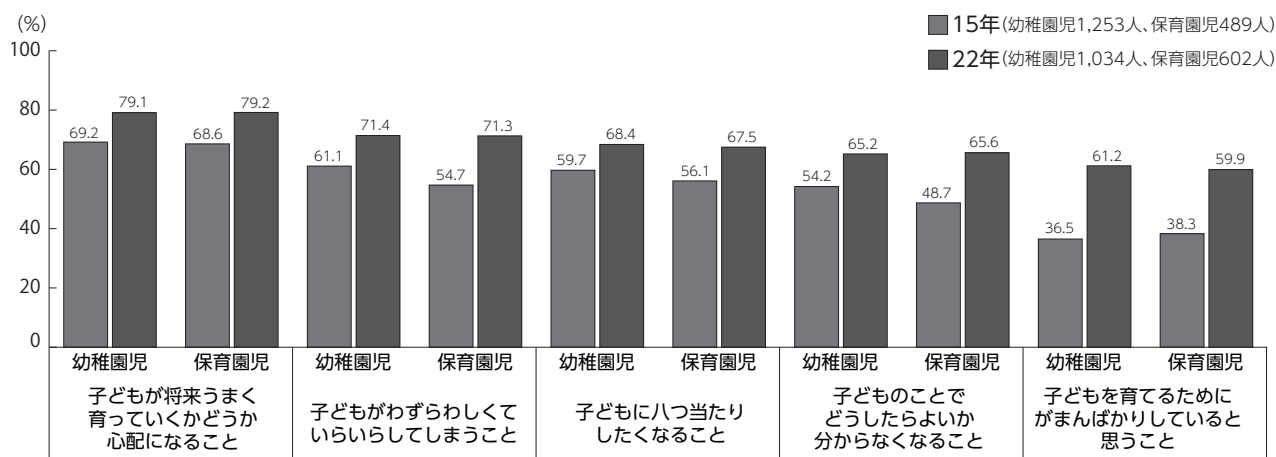
●高年齢においては、就園状況にかかわらず育児への否定的感情が強くなっている

図表2-5-4では、4歳以上の高年齢児をもつ母親の否定的感情について、就園状況別による比較結果を表している。

就園状況によつての差はほとんどみられないが、育児への否定的感情は幼稚園児・保育園児ともに5項目すべてにおいてこの7年間で増加している。保育園児をもつ母親のほうがこの7年間で増加幅が大きく、「子どもがわずらわしくていららしてしまうこと」と「子どものことでどうしたらよいかわからなくなること」については15年調査より16ポイント以上、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」については21ポイント以上増加している。

また、幼稚園児をもつ母親では、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」といった育児への負担感に関する項目において24ポイント以上増加しており、育児による束縛感が増していることが推察される。

図表2-5-4 母親の子育て意識（就園状況別（高年齢） 経年比較）



注1) 「よくある+ときどきある」の%。本分析では、小数点第1位以下も足し合わせて算出している。そのため、小数点第1位で算出した第5回報告書と数値が異なる場合もある。

注2) () 内は人数。

注3) 10項目のうち、否定的感情を表す5項目を図示。

注4) 子どもの年齢は、4歳0か月～6歳11か月。



第6節 しつけや教育の情報源

しつけや教育の情報源では、「母親の友人・知人」、「祖父母」「園の先生」の比率が高い。2015年に比べると、SNS中心に情報を得ている。

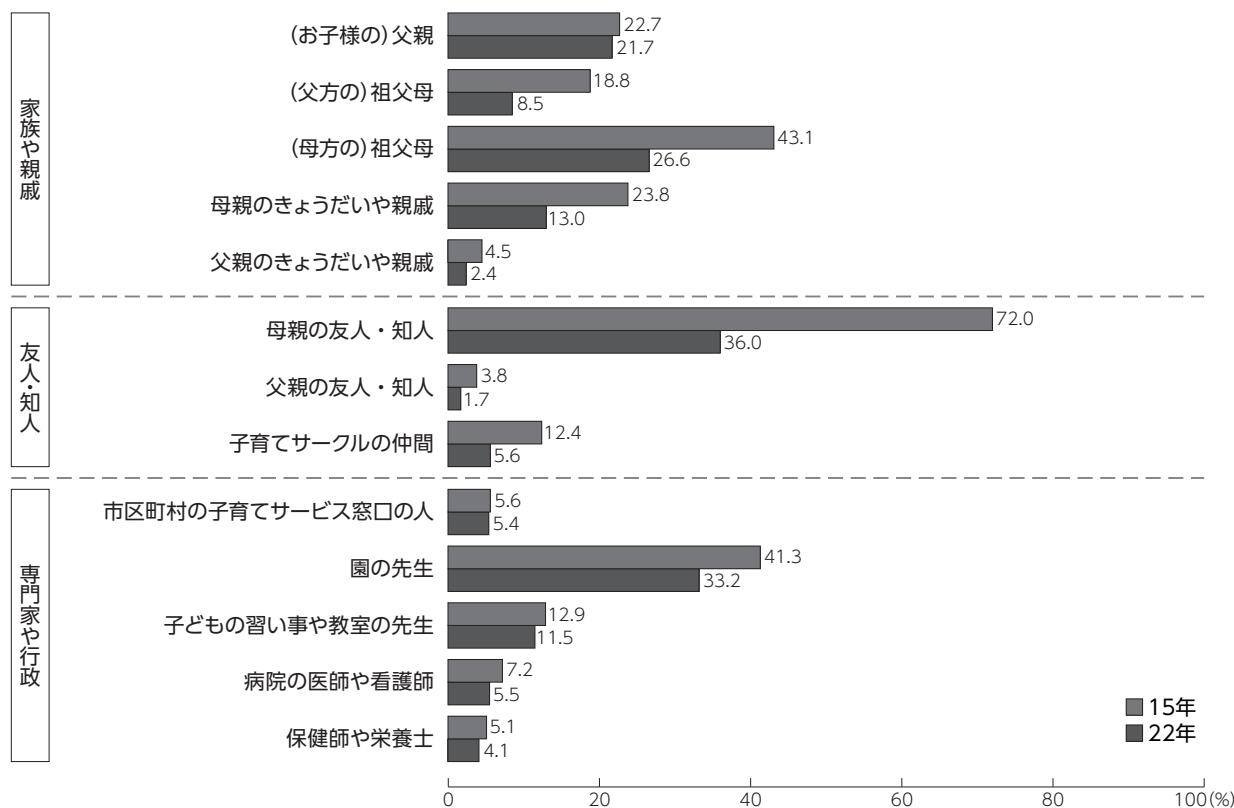
●しつけや教育の情報源では、「SNS (Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディア)」が大幅に増加

幼児をもつ母親は、子どものしつけや教育の情報をどのように得ているだろうか。調査では「現在、あなたは『お子様のしつけや教育』についての情報をどこから（誰から）得ていますか」について、複数回答でたずねた。図表2-6-1、2は15年調査と22年調査の比較をした結果を表したものである。22年では、しつけや教育の情報源として、多い順に「SNS(Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディア)」が49.8%、「インターネットやブログ」が45.2%、「母親の友人・知人」が

36.0%、「園の先生」が33.2%、「テレビ・ラジオ」が30.4%だった。種類別にみると、1位の「SNS (Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディア)」、2位の「インターネットやブログ」、5位の「テレビ・ラジオ」はウェブ・書籍などのメディア、3位の「母親の友人・知人」は友人・知人、4位の「園の先生」は専門家や行政など、母親は多方面から情報を得ていた。

情報源について全体的に減少傾向にあるなかで、「SNS (Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディア)」の項目のみ15年が22.1%、22年が49.8%であり、27.7ポイントと大きく増加した。また、「母親の友人・知人」は15年が72.0%、22年が36.0%と、36.0ポイント大きく減少した。

図表2-6-1 しつけや教育の情報源（人）（経年比較）



注1) 複数回答。

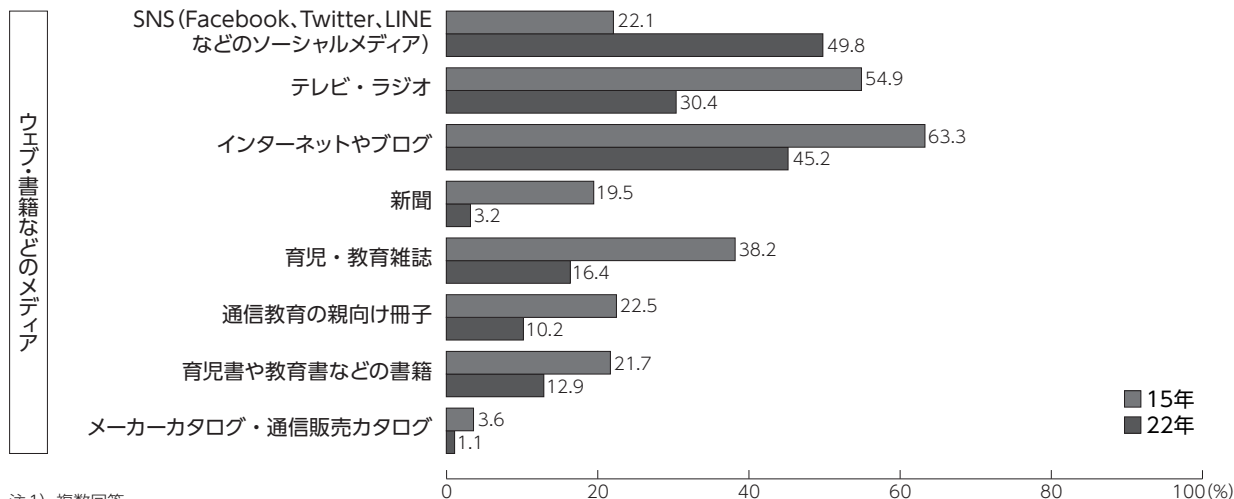
注2) 「その他」「あてはまるものはない」は図示していない。

● 0歳6か月～1歳5か月は、様々なところから情報を得ている

未就園児で0歳6か月～1歳5か月の時点と、1歳6か月～3歳11か月の時点とを比べた。図表2-6-3で下線を引いた部分が5ポイント以上差の見られた項目である。まず、「(母方の) 祖父母」では0歳6か月～1歳5

子どもの年齢により、情報源は異なってくるだろうか。

図表2-6-2 しつけや教育の情報源(メディア)(経年比較)



注1) 複数回答。
注2) 「その他」「あてはまるものはない」は図示していない。

図表2-6-3 しつけや教育の情報源(年齢区分別・就園状況別 22年)

(%)

情報源	情報源(人)	情報源(メディア)	0歳6か月～1歳5か月		1歳6か月～3歳11か月		4歳～6歳11か月	
			未就園児	未就園児	未就園児	幼稚園児	保育園児	
			(521)	(807)	(565)	(1,034)	(602)	
情報源(人)	家族や親せき	(お子様の) 父親	18.6	21.3	20.1	23.2	18.1	
		(父方の) 祖父母	10.7	8.7	10.3	8.0	7.3	
		(母方の) 祖父母	35.4	29.8	28.5	25.6	22.6	
		母親のきょうだいや親戚	15.3	12.7	8.9	14.4	13.0	
		父親のきょうだいや親戚	2.7	2.2	1.6	2.6	1.7	
	友人・知人	母親の友人・知人	27.2	32.7	29.8	42.5	36.5	
		父親の友人・知人	2.3	2.0	1.4	1.4	1.8	
		子育てサークルの仲間	7.6	7.5	4.5	5.5	3.3	
	専門家や行政	市区町村の子育てサービス窓口の人	9.0	8.3	5.5	3.9	4.3	
		園の先生	6.1	7.6	54.2	32.5	45.6	
子どもの習い事や教室の先生		4.0	7.5	4.8	14.9	14.9		
病院の医師や看護師		11.3	6.9	7.1	4.7	4.7		
その他	保健師や栄養士	8.8	6.4	4.6	2.1	4.1		
	その他	4.5	3.9	5.1	3.3	2.5		
	あてはまるものはない	28.9	32.8	22.1	25.4	24.7		
情報源(メディア)	ウェブ・書籍などのメディア	SNS (Facebook, Twitter, LINE などのソーシャルメディア)	65.4	57.6	63.2	41.6	44.4	
		テレビ・ラジオ	23.9	31.1	26.6	34.1	27.7	
		インターネットやブログ	40.1	45.7	42.6	46.8	45.5	
		新聞	1.3	1.7	2.3	3.5	4.2	
		育児・教育雑誌	20.5	15.1	17.9	17.0	16.3	
		通信教育の親向け冊子	5.6	9.1	8.5	11.6	10.3	
		育児書や教育書などの書籍	15.5	12.5	13.6	12.2	13.6	
		メーカーカタログ・通信販売カタログ	1.0	1.0	1.0	0.9	1.0	
		その他	0.8	0.2	0.2	0.3	0.3	
		あてはまるものはない	15.8	18.7	16.0	24.2	25.9	

注1) 複数回答。
注2) 子どもの年齢は、0歳6か月以上のデータ。0歳6か月～1歳5か月のデータは、未就園児以外のサンプルサイズが少ないため省略。
注3) 子どもの年齢は、0歳6か月～1歳5か月は全体のウェイトをかけて算出、1歳6か月～6歳11か月は経年比較用のウェイトをかけて算出した。
注4) 下線は、0歳6か月～1歳5か月の未就園児と、1歳6か月～3歳11か月の未就園児で5ポイント以上差のある項目の最大値。
注5) 網かけは、1歳6か月～3歳11か月では未就園児と保育園児、4歳0か月～6歳11か月では幼稚園児と保育園児で5ポイント以上差のある項目で最大値。
注6) () 内は人数。

か月では35.4%だったのに対して、1歳6か月～3歳11か月では29.8%と5.6ポイント少なかった。また、ウェブ・書籍などのメディアでは「SNS (Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディア)」「育児・教育雑誌」が少なくなる。

● 1歳6か月～3歳11か月の保育園児をもつ母親は、「園の先生」から情報を得ている

子どもの就園状況で、情報源に差はあるだろうか。1歳6か月～3歳11か月では未就園児と保育園児を、4歳0か月～6歳11か月では幼稚園児と保育園児を比べた(図表2-6-3)。

1歳6か月～3歳11か月で未就園児のほうが保育園児より5ポイント以上高かった項目は、情報源(人)で「あてはまるものはない」(未就園児32.8%、保育園児22.1%、差10.7ポイント)だった。保育園児のほうが未就園児より高かった項目は、「園の先生」(未就園児7.6%、保育園児54.2%、差46.6ポイント)、「SNS (Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディ

ア)」(未就園児57.6%、保育園児63.2%、差5.6ポイント)だった。1歳6か月～3歳11か月の場合、保育園児の母親は子どものしつけや教育について、園の先生を頼りにしていることがうかがえる。

● 4歳0か月～6歳11か月では、幼稚園児の母親は「知人・友人」から、保育園児の母親は「園の先生」から情報を得ている

続いて、4歳0か月～6歳11か月で幼稚園児のほうが保育園児より5ポイント以上高かった項目は、「母親の友人・知人」(幼稚園児42.5%、保育園児36.5%、差6.0ポイント)、「テレビ・ラジオ」(幼稚園児34.1%、保育園児27.7%、差6.4ポイント)、「(お子様の)父親」(幼稚園児23.2%、保育園児18.1%、差5.1ポイント)だった。保育園児のほうが幼稚園児より高かった項目は、「園の先生」(幼稚園児32.5%、保育園児45.6%、差13.1ポイント)だった。4歳0か月～6歳11か月の場合、幼稚園児の母親は「インターネットやブログ」、「母親の友人・知人」から情報を得ることが多く、保育園児の母

図表2-6-4 しつけや教育の情報源(母親の年代別 22年)

		(%)			
		20代 (342)	30代 (2,211)	40代以上 (857)	
情報源 (人)	家族や親せき	(お子様の) 父親	21.1	22.4	20.1
		(父方の) 祖父母	9.6	8.9	7.2
		(母方の) 祖父母	30.3	28.4	20.6
		母親のきょうだいや親戚	10.0	13.0	14.2
		父親のきょうだいや親戚	2.7	1.8	3.5
	友人・知人	母親の友人・知人	21.2	36.3	40.9
		父親の友人・知人	2.3	1.5	1.9
		子育てサークルの仲間	6.7	5.6	5.1
	専門家や行政	市区町村の子育てサービス窓口の人	7.2	5.9	3.3
		園の先生	23.3	33.3	36.7
子どもの習い事や教室の先生		3.0	10.7	16.6	
病院の医師や看護師		5.7	5.3	6.1	
保健師や栄養士		5.2	4.2	3.5	
その他	その他	1.7	3.8	3.2	
	あてはまるものはない	37.0	25.5	24.0	
情報源 (メディア)	ウェブ・書籍などのメディア	SNS(Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディア)	65.9	53.6	34.0
		テレビ・ラジオ	22.8	31.0	31.8
		インターネットやブログ	26.3	46.2	50.0
		新聞	1.5	2.9	4.8
		育児・教育雑誌	13.1	16.7	16.9
		通信教育の親向け冊子	7.3	9.9	11.9
		育児書や教育書などの書籍	8.4	13.2	13.9
		メーカーカタログ・通信販売カタログ	2.3	0.9	1.2
	その他	その他	0.0	0.3	0.1
		あてはまるものはない	24.7	20.5	24.4

注1) 複数回答。
 注2) 子どもの年齢は、1歳6か月以上のデータ。
 注3) 網かけは、年代区分別で10ポイント以上差のある項目の最大値。
 注4) () 内は人数。

親は「インターネットやブログ」と「園の先生」から同じくらい情報を得ているようである。メディアについては幼稚園児・保育園児の母親ともに、「インターネットやブログ」「SNS(Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディア)」から情報を得ることが多かった。外出先でも手軽に利用できるスマートフォン等で素早く情報を得ている様子が見られる。

● 20代の母親は、SNSから情報を得ている

図表2-6-4は母親の年代別で情報源に差があるかを表したものである。子どもが小さいほど母親の年齢も若いことから、年代別による差をみるために子どもの年齢を1歳6か月以上に限定してみよう。20代の母親と40代以上の母親を比べて差が10ポイント以上のものをみると、40代以上の母親が情報を得る比率が高かつ

た項目は、「母親の友人・知人」(20代21.2%、40代以上40.9%)、「園の先生」(20代23.3%、40代以上36.7%)、「子どもの習い事や教室の先生」(20代3.0%、40代以上16.6%)、「インターネットやブログ」(20代26.3%、40代以上50.0%)だった。一方、20代の母親が情報を得る比率が高かった項目は、人の情報源は「あてはまるものはない」(20代37.0%、40代以上24.0%)がもっとも多く、メディアの情報源では「SNS(Facebook、Twitter、LINEなどのソーシャルメディア)」(20代65.9%、40代以上34.0%)だった。40代以上の母親は様々な情報源からまんべんなく情報を得ているようである。一方、20代の母親は子育てに関する人との交流がまだ少ないことにあわせ、SNSに比較的慣れている世代であることからSNSを情報源として選択している様子が見られる。



第7節 幼稚園・保育園への要望

幼稚園・保育園に対する要望をみると、15年までの調査と比較して増加傾向にあるのは「知的教育を増やしてほしい」「保育終了後におけいこ事をやってほしい」「自由な遊びを増やしてほしい」である。

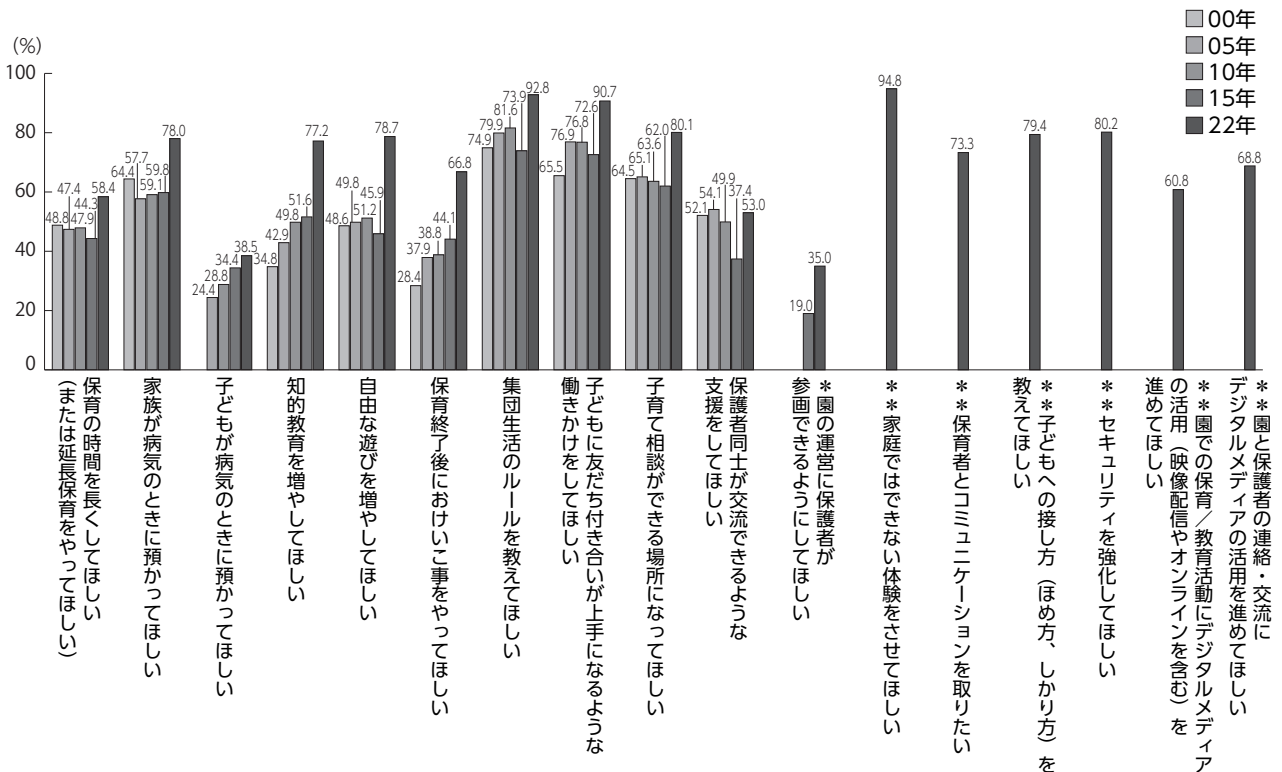
●園に知的教育やおけいこ事を求める母親が増加

子どもたちが幼稚園や保育園で過ごす時間が増え、幼児の生活や子育て生活のなかで、園の存在はますます大きくなっている。本節では、幼稚園・保育園への要望について、母親の回答結果を分析した(図表2-7-1)。

上位(「とてもそう思う+まあそう思う」の%)の項目は15年間で大きな変化はない。約9割の母親が「集団生活のルールを教えてほしい」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」と思っている。次いで、約8割の母親が「子育て相談ができる場所になってほしい」「家族が病気のときに預かってほしい」と思っている。

また、00年から一貫して増加傾向にある項目は、「知的教育を増やしてほしい」(00年34.8%→05年42.9%→10年49.8%→15年51.6%→22年77.2%)、「保育終了後におけいこ事をやってほしい」(00年28.4%→05年37.9%→10年38.8%→15年44.1%→22年66.8%)である。15年からとくに増加した項目は、「自由な遊びを増やしてほしい」であり、前回から32.8ポイントも要望が高まっている。00年から15年までの15年間で減少傾向にあった項目、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」は、22年では増加した(00年52.1%→05年54.1%→10年49.9%→15年37.4%→22年53.0%)。全体をみると、園では社会性を身につけてほしいと考える母親が多いものの、遊びや日常の保育

図表2-7-1 幼稚園・保育園への要望(経年比較)



注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。本分析では、小数点第1位以下も足し合わせて算出している。そのため、小数点第1位で算出した第5回報告書と数値が異なる場合もある。

注2) 子どもを園に通わせている人のみ回答。

注3) 「子どもが病気のときに預かってほしい」は05年から追加した項目。

注4) *は15年から追加した項目。**は22年から追加した項目。

だけではなく「知的教育」「おけいこ事」もと、要望が多様になっていることがうかがえる。また「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」が増加したこと、新規項目である「家庭ではできない体験をさせてほしい」がもっとも高い94.8%であったことについては、コロナ禍を経たことであらゆる行事が中止になったり、ステイホームの呼びかけがあったことなどにより、身近な保護者同士の人間関係の構築や、子ども同士の交流を希望する母親が増加したことが背景にある様子うかがえる。

●幼稚園児よりも保育園児、高年齢よりも低年齢の子どもをもつ母親の要望が高い

次に、子どもの就園状況別、年齢区分別に園への要望をみた結果が図表2-7-2である。まず、高年齢（4歳0か月～6歳11か月）の保育園児と幼稚園児の母親の結果を比較した。その結果、保育園児のほうが10ポイント以上高かった項目は「家族が病気のとときに預かってほしい」（保育園児83.6%、幼稚園児72.3%。以下同）、「子どもが病気のとときに預かってほしい」（44.1%、29.5%）であった。差がほとんどみられなかったのは「集団生活のルールを教えてほしい」（92.5%、93.0%）、「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」（89.7%、91.0%）など社会性に関する項目と、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」

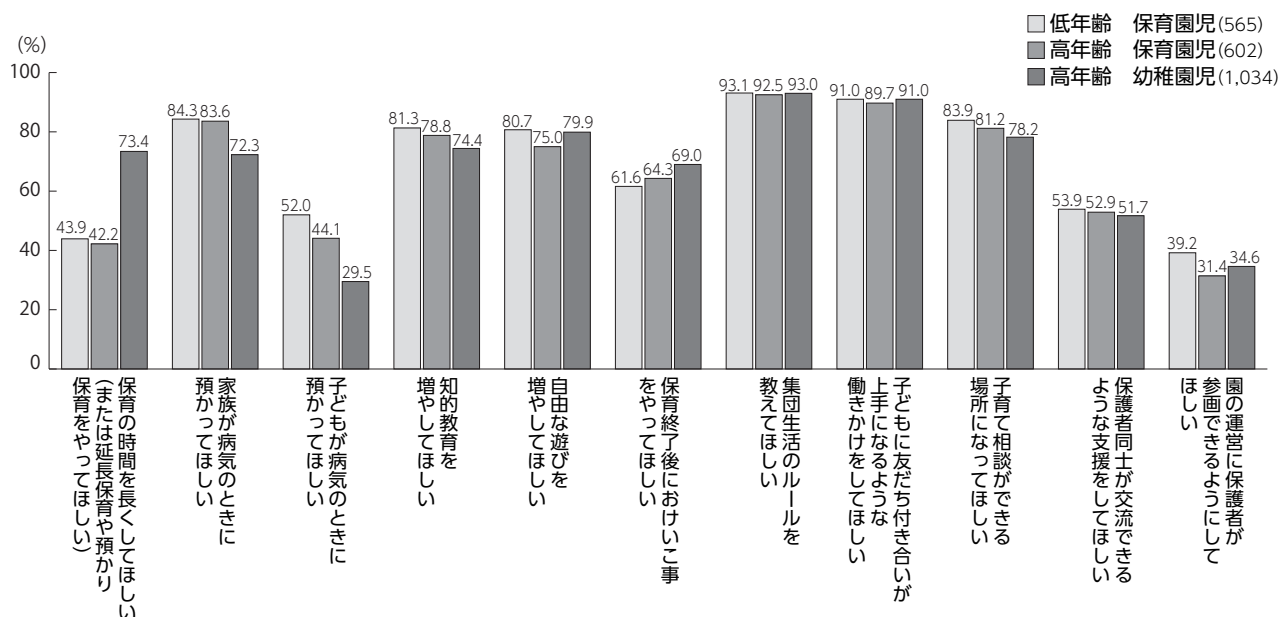
（52.9%、51.7%）であった。幼稚園児のほうが10ポイント以上高かった項目は「保育の時間を長くしてほしい」（または延長保育や預かり保育をやってほしい）（42.2%、73.4%）であった。

次に、保育園児の低年齢（1歳6か月～3歳11か月）と高年齢の母親の結果を比べると、総じて低年齢の母親のほうが選択率が高かった。5ポイント以上高かった項目は「子どもが病気のとときに預かってほしい」（低年齢保育園児52.0%、高年齢保育園児44.1%。以下同）、「自由な遊びを増やしてほしい」（80.7%、75.0%）、「園の運営に保護者が参画できるようにしてほしい」（39.2%、31.4%）であった。これらの選択率の違いとして、低年齢では子どもが病気にかかりやすいことや、低年齢のうちから豊かな情操を育みたい母親の思い、また子どもの年齢が幼いために母親に「ママ友」が少ないとしたら、子育ての悩みを園で共有したいと考える母親がより多く存在することが考えられる。

また、就園状況別、年齢区分別にかかわらず約9割の母親が「集団生活のルールを教えてほしい」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」と思っている。

これらの分析結果からは、高年齢よりも低年齢の子どもをもつ保育園児の母親のほうが、園に対する要望が多いこと、就園状況や年齢区分にかかわらず社会性の育成への関心が高いことが明らかとなった。

図表2-7-2 園への要望（就園状況別・年齢区分別 22年）



注1) 「とてもそう思う」 + 「まあそう思う」の%。本分析では、小数点第1位以下も足し合わせて算出している。そのため、小数点第1位で算出した第5回報告書と数値が異なる場合もある。

注2) 子どもを園に通わせている人のみ回答。

注3) 調査時点における子どもの年齢区分は以下のとおりである。

低年齢：1歳6か月～3歳11か月の幼児。

高年齢：4歳0か月～6歳11か月の幼児。

注4) () 内は人数。